

# 南吉の乗った田口線

清崎に開館する新しい郷土館の駐車場わきに田口線車両「モハ一四」が展示されている。

この車両の中を一度覗いてほしい。「病室のやうに白く塗られた」と新美南吉が未完の作品『山の中』で表現している、そのままの様子が見てとれる。



病室のような車内

新美南吉は昭和十三年（一九三八）に安城高等女学校の教員となつた。その年の七月から八月にかけて、鳳来寺山麓の賢居院で講習を受けるため奥三河を訪れた。講習の前後であろうと推測されるが、塩津温泉を訪れている。小説の主人公の行動として描かれている、田口鉄道や清崎地内、塩津温泉の施設や人々の描写が、現実に体験した者でなければ描きえないものとなっている。その足跡については、平成二十五年十一月に田口の奥三河郷土館で「設楽に南吉がやってきた」と題して特別展で紹介した。

この南吉も利用した田口鉄道は、豊川鉄道（正確には長篠、鳳来寺口間は鳳来寺鉄道の運営の二十二・六キロメートルの運行を行っていた。鳳来寺口駅は現在のJR飯田線の本長篠駅にあたる。当時の「長篠駅」と呼ばれていたのは、現在の大海駅である。明治三十三年（一九〇〇）開業当時は「大海」であったが三年後には「長篠」に改称されていた。大海駅のすぐそばの踏切が今も「長篠」と名付けられているのはその名残であろうか。

南吉は『山の中』で「だんだん山の中へ入って来て、鳳来寺口といふ驛で電車を乗り換へた。中の空いた、病室のやうに白く塗られた單線のたゞ一輛の車に乗り込んで：と主人公の行程を表現している。豊川鉄道から鳳来寺鉄道へ乗り換えなしで来られたのがわかる。南吉は、車内で目撃した人々や車窓から見える川や合飲木（あひのみき）の情景を描き出し、都会から訪れる人々の目に映る奥三河の適格な描写が目を引く。また、それらに触れた主人公の心理的描写も

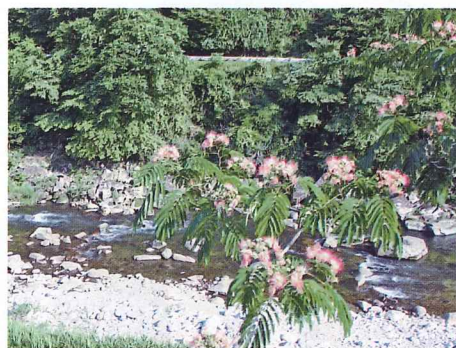
面白い。



田口線車両

さて、郷土館に設置されている田口鉄道の車両は、鉄で覆われている。が、その基本構造は木材で作られている。この車体は、平成二十年（一九四九）度経済産業省が選定した「近代産業遺産群」の一つとされた。「森林資源と伝統技術を基盤として多分野に発展した東海地方の木材加工業の歩みを物語る近代化産業遺産群」とその木材加工技術を評価している。つまり、その報告書に「鉄道車両製造の分野では、我が国の鉄道創成期に製造された車両は、金属素材の十分な調達に困難であったこともあって、車体や内装に木材が多用されていた。」とあるように、森林資源の運送等ではなく、木材加工技術の活用が伝承という意味での選定であった。この車両は大正十四年（一

九二五）に製造されたことが車内のプレートに刻まれている。明治二十九年（一九〇六）に設立された日本車両で建造されたもので、この会社の業務は、当初は木造車両の製造が中心であった。



合飲の花咲く岸辺

新美南吉が乗ったと思われる車両は、中に入ると扉や日よけなど、ほとんどが木に覆われている。その中に立つて、木のぬくもりを感じることも奥三河らしい体験であろう。寒狭川のほとりには南吉が好きだった合飲木が多くみられる。また、この車両の設置場所からほど近いところにあつた清崎駅に、降り立った南吉の姿を想像してみるのも新しい郷土館の楽しみ方の一つかもしれない。

（設楽町文化財保護審議会委員

平松 博久）